

# 1. 研究・調査報告

## カナメモチの挿し木の発根に及ぼす用土の影響

中 島 良 文

### 緒 言

生垣に利用されているカナメモチ（バラ科，ナシ亜科，日本原産）の繁殖は，一般に挿し木で行われている。唐湊果樹園では植物繁殖の教材としてカナメモチを用いているが，これまでは挿し木の用土にはボラ土を供して来た。学生実習で用土と発根への影響を理解させるために各種用土を供して挿し木実習を行った。

### 材料と方法

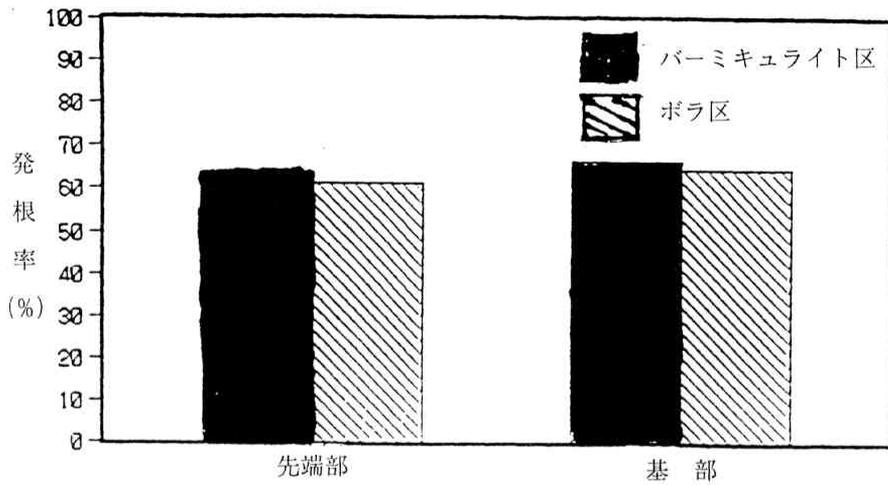
材料は唐湊果樹園の標本園及び生垣に植栽されているカナメモチを供した。挿し穂は1995年の3月に発生した新梢の先端部と基部を用いた。挿し穂の長さは10～13cmで，各穂とも先端に葉を2～3枚残し，葉は $\frac{1}{2}$ 位先を切除した。挿し穂の基部は切口を切り返した。挿し床は，縦32cm横47cm深さ7cmのプラスチック製の育苗箱を用いた。用土は，ボラ土，バーミキュライト，川砂及び鹿沼土を用いた。実習Ⅰでは，1995年6月5日に用土はボラ土とバーミキュライト，実習Ⅱでは，同年6月16日にバーミキュライトと川砂，実習Ⅲでは，同年6月19日に川砂と鹿沼土を用いた。各実習とも，挿し床には1箱に用土を半分ずつ詰めた。学生一人1箱として用土ごとに，先端部及び基部各20本を挿し木した。挿し木の深さは挿し穂の長さの $\frac{1}{3}$ とし，斜め挿しにした。挿し床は，ミスト室に置き管理した。ミスト室は，雨除けビニールを張り両側面で換気した。内側に黒の寒冷紗を水平に張り遮光した。調査は実習Ⅰは挿し木後140日，実習Ⅱは143日及び実習Ⅲは133日に行った。発根については，発根している株，カルス形成のみの株を調査したが，本報告では発根株について報告する。

### 結果と考察

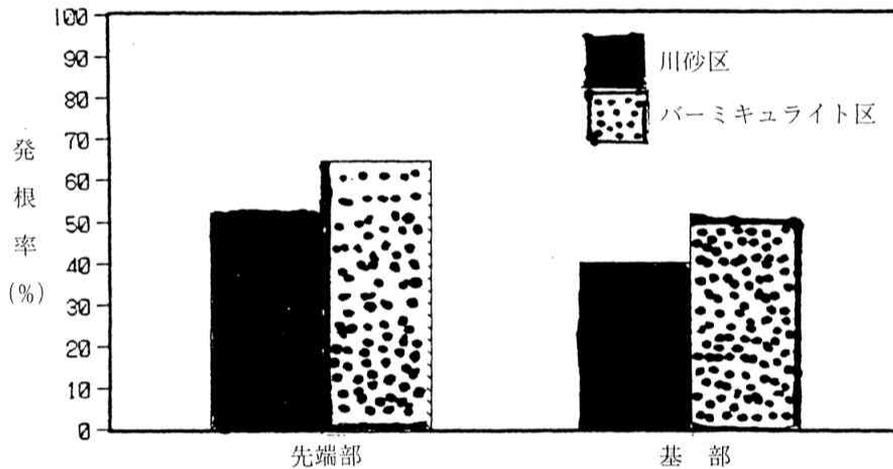
気温は外気温よりやや低く推移した。実習Ⅰの発根状況は第1図で示すとおり先端部の平均発根率はボラ土区で61.3%，バーミキュライト区で64.7%，基部はそれぞれ63.9%，66.6%であり，先端部及び基部ともバーミキュライト区が高かった。実習Ⅱの発根状況は第2図で示すとおり，平均発根率は先端部はバーミキュライト区で64.4%，川砂区で51.5%，基部はそれぞれ52.1%，40%であり，両部位ともバーミキュライト区が高かった。実習Ⅲの発根状況は第3図で示すとおり，先端部は鹿沼土区で80.6%，川砂区で47.5%，基部はそれぞれ71.3%，45.0%であり両部位とも鹿沼土区が高かった。挿し穂部位別では，バーミキュライト区では部位別の発根率の差は小さかったが，鹿沼土区では実習Ⅲのみであるが，先端部が基部より高かった。

### 摘 要

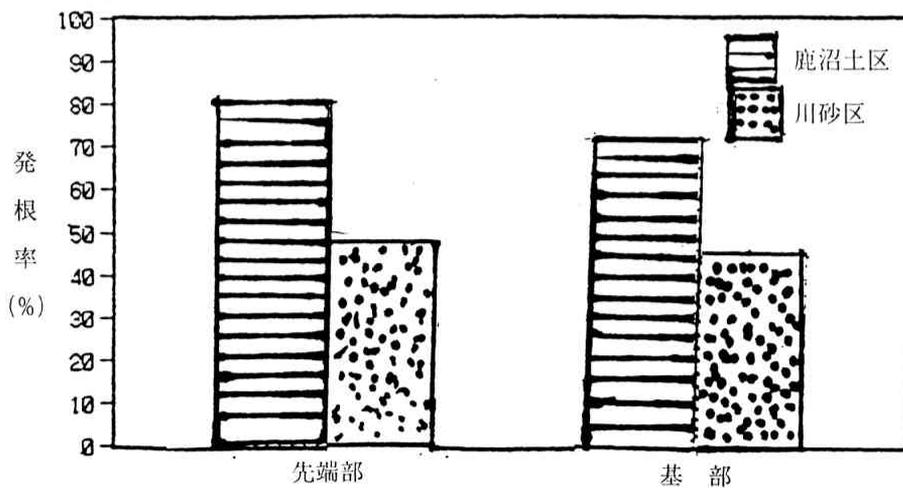
春に発生した新梢を供して6月に挿したカナメモチの挿し木では，発根率はバーミキュライト区先端部で64.4～64.7%，基部で52.1～66.6%，鹿沼土では先端部80.6%，基部71.3%で，バーミキュライトが川砂及びボラ土より優れていた。



第1図 カナメモチの挿し木の発根に及ぼすボラ土とバーミキュライトの影響。  
挿し木 1995年6月5日 調査日 1995年10月23日。



第2図 カナメモチの挿し木の発根に及ぼすバーミキュライトとも川砂の影響。  
挿し木 1995年6月16日 調査日 1995年10月27日。



第3図 カナメモチの挿し木の発根に及ぼす鹿沼土と川砂の影響。  
挿し木 1995年6月19日 調査日 1995年10月30日。